



カントウータ

Cantuta

No. 53



ポリビア西部にある世界最大の塩湖であるウユニ塩湖

1. **ポリビアと日本を繋ぐ企業・団体情報** :
最先端の技術を支える協和工業株式会社……………小川 完治
2. 初のアフリカ大陸：タンザニア滞在記(その2) ………上崎 雅也
3. ポリビア開拓記外伝—コロニアオキナワ 疾病・災害・差別を
生き抜いた人々— (5) ……………渡邊 英樹

一般社団法人日本ポリビア協会

ASOCIACIÓN NIPPON-BOLIVIA

ポリアと日本をつなぐ企業・団体情報

1. 最先端の技術を支える協和工業株式会社

協和工業株式会社 海外業務担当

小川 完治

1. 協和工業株式会社の沿革

当社は山口県周南市にあり、1952年8月に株式会社トクヤマの生産設備の保全を主たる業務として設立し、今年で創業71年になります。株式会社トクヤマは苛性ソーダ・塩カル・クロルアルカリなどの化成品、シリコン（高純度多結晶シリコン）・ICケミカル（高純度IPA）・シリカ・放熱材料（高純度窒化アルミニウム粉末）などの電子先端材料やファインケミカル・微多孔質フィルム・歯科器材などのライフサイエンス関係製品の製造販売、廃棄物再資源化などの環境業務を行っています。

当社は1969年7月に、株式会社トクヤマの生産設備保全業務に加えて樹脂加工部門を設立し、ポリプロピレン製包装資材及び電線介在糸の製造販売を開始しました。

その後、1984年の株式会社トクヤマのシリコン・エンジニアリング（Silicon Engineering）工場の竣工に伴い、半導体原料と乾式シリカの製造工程での品質保証を含めた作業部門を設立しました。以後、日本国内外におけるモノづくりの経験と実績を蓄積し、今日まで着実に業務を拡大させております。

2. 協和工業株式会社の業務内容：

世界に誇る高品質を支える

当社が取り扱う製品は、多結晶シリコンとレオロシール(乾式シリカ)になります。株式会社トクヤマの多結晶シリコンは、不純物未混入率がイレブンナイン（99.99999999%）と言われる世界でも類を見ない高品質を実現しております。当社は、どちらの製品も世界レベルの品質管理を守り、トクヤマブランドを支えています。



写真1-1 プラント工場遠景

電子機器の頭脳ともいべきIC（Integrated Circuit）のもととなるシリコンウェハの主原料が、多結晶シリコンです。



写真1-2 多結晶シリコン

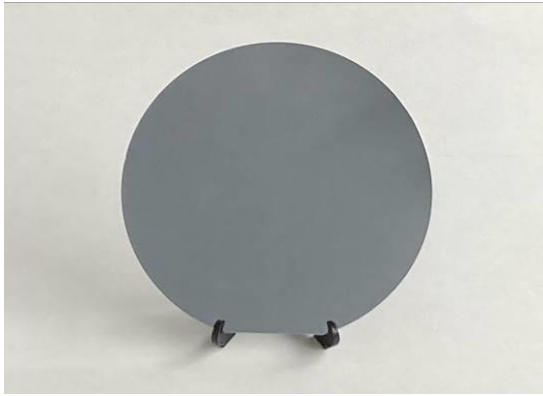


写真1-3 シリコンウェハー

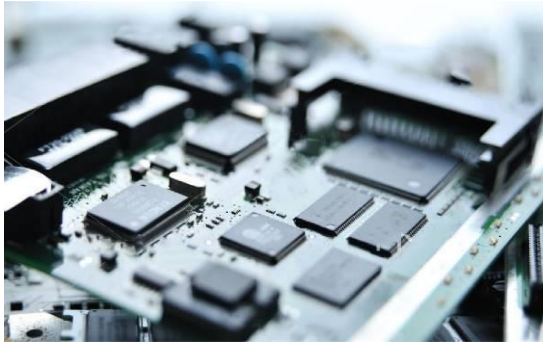


写真1-4 電子機器の基盤に複数のICを使用します。

また、レオロシールは、各種接着剤や塗料類、鞋底、紙おむつ、歯磨き粉など様々な用途に使われ、私たちの生活の中に溶け込んでおります。たとえばおむつでは吸水材としてレオロシールが使用されています。またペンキの粘土調整剤として使用されたり、鞋底には、ゴムに柔軟性を与える物質として使われているなど、生活の中で必要な物質となっています。



写真1-5 レオロシール：多結晶シリコン製造工程で派生する四塩化珪素(SiCl₄)を原料とする煙霧状シリカ。

これら製品のひとつひとつに、我々の技術・経験とノウハウが活かされているといえます。



写真1-6、7、8 生活の中に密着した製品の中に溶け込んだ素材

3. 南米からの就職希望者採用の経緯

1980年代後半のバブル景気により起こった人手不足解消のため、二代目の代表取締役であった近森清(故人)が自身の持つ人脈をたどり、各国の日系人協会を訪問したことが始まりです。各国の協力者にアテンドをしていただき面接を実施し、多くの方を採用することができました。

その後、来日した各国の日系従業員の紹介によって南米より多くの方が来日をし、継続的に日系従業員の就労につながっています。現在、南米より帰化をされた方を含めて、男女合わせ18名（内10名が日系ボリビア人）が弊社に所属をして、本作業に従事しています。

採用開始から今日までに入社された日系就労者の出身国は、南米からでは、ボリビア、ペルー、ブラジル、アルゼンチン、パラグアイの5カ国です。今までに累計で143名の日系(内日系ボリビア人15名)の方々と一緒に仕事をしており、今後も引き続き採用を予定しています。

4. 戦力として期待している

日系ボリビア人

日系の方から、日本で就労を希望している日系ボリビア人がいるとの話があったため、2017年8月にサンタクルスを訪問し、当時現地にあった三浦商店の三浦氏にアテンドをしていただき、在サンタクルス領事事務所(小林弥領事)及びボリビア日系連合会(当時の事務局長の佐藤信壽氏)を訪ね、日系就労希望者1名の面接を実施することができました。

2019年9月に再度ボリビアを訪問し、本格的にボリビアからの人材を採用したいと考えました。前述の佐藤氏にアテンドをお願いし、以下の都市で日系就労希望者の面接をいたしました。

- ・サンタクルスにて11名の面接を実施。
- ・リベラルタにて15名の面接を実施。

その結果6名を採用し、来日してもらうこ

とになりました。

この時に採用した従業員の紹介で、その後、7名が入社することとなるなど、日系ボリビア人の間に口コミ、紹介等の人的ネットワークのあることで、継続的に当社で働いていただいています。現在10名に上る日系ボリビア従業員が業務に従事していますが、彼らは、真面目に業務に取り組まれており、当社の貴重な戦力となっています。

ここ何年かコロナ禍のため、南米での採用活動は休止状態ですが、来年早々にも現地での面接会の再開を検討しています。今後もボリビアとのご縁を大切に、当社としては、日系ボリビアの方々に良好な就労環境の提供に引き続き取り組んでまいります。 (終わり)



写真1-9 当社で働く日系ボリビア従業員

※協和工業株式会社のホームページはこちらです。

<https://www.kyowa-ind.com/>



2. 初のアフリカ大陸：タンザニア滞在記（その2）

一般社団法人日本ボリビア協会
理事 上崎 雅也

今回は、首都ドドマに移動してからの生活に触れる前に、2018年5月11日タンザニア、ダルエスサラーム空港に降り立った時点で時計の針を戻す。

1. 混沌の中の秩序

到着後、無事空港でオフィシャルビザを受領した後、バゲージクレームでの出来事。大量のスーツケースが小さなターンテーブルの上で山盛りの状態。フロアに雪崩のごとく崩れ落ちて、どれが自分の荷物なのか見当がつかない。いきなりアフリカの洗礼か。汗だくであちこちから自分の荷物を見つけ出し、X線検査装置に投げ込んだ。次から次に投入される大量の荷物にまぎれてまたもや自分の荷物の行方を確認できない。

この時点で心中、スーツケースの盗難も覚悟したが、そんな杞憂をよそに、10分後には、すべての荷物の無事を確認して、確保を諦めていたカートも親切な人に譲ってもらい、JICA 手配の車まで無事運ぶことができた。アフリカは、54か国もあるので、他国でも同様とは、即断できないがタンザニアは治安が良いとの事前情報の正しさを認識した。

この後の経験を通して、タンザニアに限っての結論ではあるが中南米全般よりも治安は、良かったように思う。

2. のんびり国民気質

滞在して数日でタンザニア人の気質

は、聞いていたとおり穏やかであることが判ってきた。また、前回述べたとおりアフロ系に中東系・インド系民族が混在する国なのでこれら地域の文化・伝統があふれている。明け方にコーランの音がモスクから響き、日中はボリウッド音楽に体が揺れる。更には、夜、バーで飲んでいるとレゲエを思わせる音楽が流れてくるので南米の田舎町に来たような錯覚すら感じた。

着任した2018年当時の大統領はムスリムだったが、夫人と子息たちはキリスト教徒、副大統領はムスリムで、首相はキリスト教徒という事実が、タンザニアに宗教対立が存在しないことを示している。社会生活を営む上で余計な緊張感がないことがのんびりとした国民性を生むのだろう。



写真 2-1 ドドマの英国聖公会系の教会の礼拝風景。聖歌は、すべてアップビートのゴスペル風だ。

3. ほのぼの国民気質の要因は？

タンザニアは、独立直後から社会主義政策でスタートした為か、貧富の格差が小さい。中南米諸国に見られる富裕層と極貧層のコントラストやスラム街などはダルエスサラームでもドドマでも目にしなかった。所得分配の不公平は、社会を

殺伐とさせテロや時に内戦にもつながる。この所得格差が少ないことが、前回触れたとおり民族対立やさらには、宗教対立も少ない穏健な社会を生んだ要因なのかも知れない。

4. 英語が苦手なシャイ！

日常生活では、英国を旧宗主国とする割には、英語が予想外に通じない（但し、日本よりは、まし）。仕事の間では、さほど問題ないが、タクシーの運転手やホテルの客室係は、中学生レベルの英語しか話せない。接続詞や関係代名詞を使うと混乱する。相手がスーパーのレジ嬢やホテルの受付になると理解は、してくれるのだが、スワヒリ語訛りの英語なのでヒアリングが難しい。おまけに性格的に内向的な面があり大きな声での会話を恥ずかしいと感じているようにも思える。

あるホテルで昼食時に同席した財務省の職員と話す機会があったが、私がタンザニア人は、シャイで穏やかであること。それに女性の社会進出が進んでいることを指摘したところ、こんな説明をしてくれた。

「タンザニア人は、自信のない民族なのです。植民地時代の影響かも知れない。目上の人や外国人に何か言われると、すぐに同調してしまう。自分の考え方に自信がないのです。そしてタンザニアは、一般的には、男尊女卑の国ですよ。」

隣で話を聞いていたドドマ大学に通っている娘さんに質すと「やはり親には、逆らえないし、男女共同作業で女性は、

先ず男性の意見を尊重します。」という返事だった。

どうも私の受けた印象とは、異なるが、このジェンダー課題については、「その3」で述べる。

5. 隣国ケニアに勝てる？

隣国ケニアでは、全土で英語が問題なく通じるらしい。ケニアの一人当たり個人所得（GNI）は、2018年当時約1,800ドルでタンザニアの二倍。両国とも英語とスワヒリ語を公用語としているがケニアは、自由主義・資本主義路線の国で、英語を重視し、逆にタンザニアは、建国当時から社会主義・民族主義的色彩が強くスワヒリ語を重視している。これが両国民の英語力に大きく影響している。

それ故か、タンザニアでは外資系企業が少ない。ちなみに自動車産業がタンザニアには、存在しないが、ケニアでは、ノックダウン製造ではあるが、現地資本の企業による日欧ブランドの四輪車と二輪車が製造されている。

外資系企業の参入には、労働力の質だけでなく法制度や国民が外資を歓迎するかどうかが大きい。ケニアは、ケニアよりも発展が遅れている割に人件費が高く外資が参入をためらう要因の一つだとも聞く。もし3で述べた、所得分配の公平さに起因しているとなれば皮肉な話だ。

6. スワヒリ語事始め

タンザニア人が日常会話に使う言語は、

スワヒリ語である。日本語・スペイン語と同じく母音は、[a][e][i][o][u]の5つで、アクセントも原則スペイン語と同様、最後から二つ目の音節に置かれる。彼らの会話を聴いていて、時々日本語やスペイン語に聞こえることもある。

少し異なるのが、日本語には、「みかん」「羊羹」の様に[n]で終わる単語があるが、スワヒリ語では、語尾が必ず母音で終わる。タクシーの運転手に”How are you?”と聞くと”Goodi Goodi.”と返ってくる。”Very good.”と言う意味だが、自然に語尾に[i]がくっつくのだ。繰り返すのは意味を強調する為で”very”の代わりに繰り返すということだ。アジア・太平洋諸国語や中南米先住民語で良く見られる現象だ。我々日本人が「そこじゃない。ここここ！」と叫ぶのと同根だ。



写真 2-2 冒頭の”OFISI”で事務所への案内表示と判る。

サッカーの”World Cup”もスワヒリ語会話の中では”Worldi Cupi”と発音する人が多い。英語に習熟した人でも、スワヒ

リ語で話すときは”spirit”を”spiriti”と発音していた。韓国人が語頭の濁音を苦手としたり、日本人が[l]と[r]を区別出来ないとか、母語の影響力の強さを感じる。

写真 2-2 をご覧いただきたい。OFISI は、想像がつくと思うが英語の Office を外来語として取り入れスワヒリ語化したものでまさしく「オフィス」である。

7. 中国の大き過ぎるプレゼンス！

赴任時のカタル航空便に 30 代と思しき中国人の若者が乗っていた。中継地のドーハを飛び立ち昼食が終わってもまだワインを注文し結構酔いだした。私は、旅の疲れもあり、うとうとしていたが、目が覚めた時に”Japan is a very small country!”と叫ぶ大声が聞こえてきた。どうやら彼の隣の乗客とキャビンアテンダントを相手に、お国自慢を始めたらしく、私が目覚めた途端、拙いと思ったのか、今度は、中国語が如何に機能的な言語であるかの講釈やらインドのネガティブ・キャンペーンをこれも大声で語り始めた。なるほど、こんな事は、まだまだありそうだ。

タンザニアに住む日本人は、2018 年当時で 300 人ほど。中国人は、5 万人と言われていた。毛沢東の時代から中国は、アフリカに鉄道や道路などのインフラを建設するなど独自の経済協力を実施してきた。タンザニアとザンビアを結ぶタンザン鉄道（1965 年に検討開始、1976 年

完工)は、その代表格と言える。私の現地滞在中は、首都ドドマをはじめ、地方の港湾や空港の建設の為に多くの中国人労働者が送り込まれていた。



写真 2-3 中国との新港建設交渉に待ったをかけたマグフリ大統領 (当時、Wikipediaから)

タンザニアには中国が推し進める「一帯一路政策」の中でも重要案件と位置付けられるダルエスサラーム北方のバガモヨに 1 兆円以上の資金で大型新港を建設する計画があり、政府間で援助実現に向けて交渉中であった。

しかしながら、このプロジェクトは 2019 年にタンザニア政府が港湾施設を中国の利権の為に一方的に利用されかねないとの懸念を表明し交渉が暗礁に乗り上げたままになっているようだ。「一帯一路政策」において非常に重要な案件であるが、中国経済のバブル崩壊に伴う最近の混乱もあり今後復活するのかどうか筆者としても注目している。

ダルエスサラーム市内には、結構中華料理店が存在するが、時には日本人グループで入った途端、中国人客の指すような視線に遭遇したし、ゴルフ場での後方からの打ち込みも日常茶飯事であった。

一部の中国人ではあるが、中華思想丸出しの無自覚な尊大は、自重してほしいものだ。

ただ、冷静に考えると、中国の経済面での貢献は、否定できない。日本が 60 年代以降、廉価な家電製品、オートバイ、自動車等を世界に普及させたと同様、中国もこの 20 年間、最初は「安かろう、悪かろう」と言われながらも世界の工場として、繊維製品、雑貨品、家電製品、自動車から携帯電話と多くの製品を世界に輸出してきた。

その結果、アフリカ諸国におけるスマホを含む携帯電話の普及率は、80%近いと言われており、大きな社会貢献と言えるだろう。ただ、問題は、その規模が巨大過ぎることと、並行して拡大する密輸品の横行である。アフリカでは、中国からの密輸品が大量流入し、正規の製品が売れず、地場産業が消えたり、国内生産していた外資が引き揚げるケースも出ている。中国政府も密輸業者の取り締まりに本腰を入れ始めたようだが既に確立した密輸シンジケートを摘発するのは容易ではないだろう。 (その 3 に続く)



写真 2-4 現地での数少ない楽しみの一つであったゴルフ。前方への打ち込みは厳禁である

3. ボリビア開拓記外伝

—コロニアオキナワ 疫病・災害・差別を生き抜いた人々— (5)

一般社団法人 日本ボリビア協会相談役
渡邊 英樹

だい ぶ

第二部 ボリビアへ 1969~1974

とうざいれいせん ふんかこう

東西冷戦の噴火口ボリビア

ごう おな そら うえ

アポロ11号と同じ空の上に

かいがいいじゅうじぎょうだん にほんじん せんご
海外移住事業団という日本人の戦後の

しゅうだんいじゅうち しえん おこな せいふ
集団移住地への支援を行っていた政府

きかん はい どうき わたしじしん かがいいじゅう
機関に入った動機は、私自身が海外移住

しこう
志向であったからだ。

わたし しょうわ ねん ながのけん きゅう
私は、昭和16年に長野県の旧

うすだちょう う むかし ふゆ
白田町に生まれた。昔は、冬になると

ひょうてんか どい か かんれいち うえ
氷点下15度以下になる寒冷地の上に、

さんかん せま たばた まず とちがら
山間の狭い田畑ばかりの貧しい土地柄で

うみ せま とち す もの
あった。海もなく、狭い土地に住む者は

かいがい こうだい とち あこが つよ
海外の広大な土地への憧れが強くなる。

ながのけん やく まん せんにん まんしゅうかいたくだん
長野県は約3万4千人の満州開拓団を

おく ぜんこくだん い けん
送った全国断トツ1位の県であるが、こ

ふうど おお よういん
うした風土が大きな要因となっている。

けっか いた ひげき みま
その結果、痛ましい悲劇にも見舞われて

いる。

けん か しゅうせんじ まんしゅう しんこう
県下には、終戦時に満州に侵攻したソ

れんぐん たたか じゆんしよくしゃ のこ
連軍との戦いの殉職者や残された

ろうじんふじょし しゅうだんじけつしゃ いれいひ
老人婦女子の集団自決者の慰霊碑がいた

いいやまし よにん
るところにある。飯山市450余人、

なかのし よにん し よにん
中野市600余人、長野市600余人、

うえだし よにん いいだし よにん
上田市200余人、飯田市1000余人

きたあいきむら よにん けんか し
そして北相木村300余人と県下の市

ちょうそん ぎせいしゃ いた いれいひ
町村のほとんどに犠牲者を悼む慰霊碑が

あるほどである。

わたし おば にしわきとくこ わか ころ
私の叔母の西脇徳子も、若い頃に

まんしゅうかいたく あこが ひろしま じょしたくむ
満州開拓に憧れて広島の子拓務

くんれんじょ はい せっきよくてき あたら
訓練所に入っている。積極的に新しい

ものごと と く い しんしゅ きしょう
物事に取り組んで行く「進取の気性」の

かたまり じよせい のち とうきょうこうとう
塊のような女性で、後に東京高等

ふくそうじょがくいん お せんご ようさい
服装女学院を起こして戦後の洋裁ブーム

けんいん
を牽引した。

としご ちか おとうと わたし はほ か
年子に近い弟のいた私は、母の代わ

おば そだ どうぜん
りに、この叔母に育てられたも同然であ

なん えいぎょう う おも
ったから何らかの影響を受けていたと思

しょうがっこう はい せんせい がた なに
う。小学校に入ると先生方が何かにつけ

せんそう ま
て「だから戦争に負けたんです」「だか

にほん い
ら日本はダメなんです」とよく言った。



写真3-1 毎夏来訪の「のらくろ」の田河水泡先生(右から2人目)を囲んで。祖父母、父母、生後10か月の筆者、左端が叔母徳子(1942年)

まち せんとう い げ た だつ い いるい
町の銭湯に行く和下駄や脱衣カゴの衣類
ぬす はいきゆう さかな
が盗まれた。配給の魚のタラには、ウ
わ みな た
ジが湧いていたが、皆それをはじいて食
べた。ダメを納得させる社会現象が至る
ところ あふ べいへい な
所に溢れていた。米兵の投げるチョコレ
ートやガムに情けないと思ながらも飛
びついた。夢は、ダメな日本を脱出し
かいがい いじゆう しゅうやく
て海外に移住することに集約されていっ
た。

しょうわ ねん しゅうしょくひょうが き しんぶん
昭和40年の就職氷河期に、新聞の
きゅうじんぼしゅう かいがい いじゆう もじ と
求人募集の「海外移住」という文字に飛
びついた。そして、せつりつ ねんめ かいがい
設立2年目の海外
いじゆうじぎょうだん しゅうしょく しよくりょうなん
移住事業団に就職した。食糧難、
しゅうしょくなん そつこうせい ゆうこう せいさく み
就職難に即効性のある有効な政策を見
いだせない国が海外移住を奨励した時代
があつたのである。それは、せんりょうせいさく
占領政策を
えんかつ すず べいこくせいふ おもわく
円滑に進めたいという米国政府の思惑と
いっち
も一致した。

にほん きょうかい にほんかいがい
日本ボリビア協会ならびに日本海外
いじゆうかぞくかいれんごうかい しょだいかいちょう
移住家族会連合会の初代会長であつた
たなかたつおしゅうぎいんぎいん のち つうしょうさんぎょう
田中龍夫衆議院議員（後に通商産業
だいじん もんぶだいじん かいごろく
大臣・文部大臣）の回顧録によると、1
ねんせいぎいん とき なんべいしきつ きと べいこく
年生議員の時に南米視察の帰途の米国で
い よしだしげる
カナダからニューヨーク入りした吉田茂
しゅうしょう あ ちゅうなんべい いじゆうそくしん
首相に会って中南米への移住促進を
しんげん
進言したという。

よしだそうり きょうめい べいこく
吉田総理の共鳴により、米国からの1
500万ドルの移民借款が成就したとあ
る。(平成4年12月10日発行の「移住
かぞく し
家族」紙)

せんご かいがい いじゆうぎょうせい
こうして戦後の海外移住行政は、
がいむしょうしゅかん もと しゃっかん つか
外務省主管の下で、借款を使って
ざいだんほうじんにほんかいがいきょうかいれんごうかい にほん
財団法人日本海外協会連合会と日本
かいがい いじゆうしんこうかぶしきかいしゃ ふた
海外移住振興株式会社という二つの
とくしゅほうじん せつりつ すいしん
特殊法人が設立され推進された。

じゆんたく しきん
しかし、潤沢な資金があるわけではな
いじゆうち せんていちようさ ふじゆうぶん うえ
く、移住地の選定調査も不十分な上に、
きばんせいび ふび にゆうしょく
基盤整備が不備なところに入植させた
ため南米各地の移住地は問題が噴出して
いた。

しんぶんしじょう かいがい いじゆう きみん
新聞紙上では、「海外移住は棄民」と
がいむしょう ふさく いじゆうぎょうせい ひはん
外務省の不作為の移住行政を批判する
かつじ さか つか
活字が盛んに使われた。それをどうにか
かいけつ ふた だんたい とうごう
解決しようとして二つの団体が統合され
りょうほうじん しよくいん ひつ
て両法人の職員もそのまま引き継いで
かいがい いじゆうじぎょうだん ほつそく
海外移住事業団が発足した。

かんとくかんちょう がいむしょう
監督官庁は外務省のままであつたが、
しょだいりじちょう もとけいしそうかん ひろおかけんじ
初代理事長には元警視總監の広岡謙二、
ひつとうりじ もとけいさつちようちようかん かしむらのぶお
筆頭理事には元警察庁長官の柏村信雄
りょうないむかんりょうしゅつしんしゃ しゅうにん
の両内務官僚出身者が就任した。
わたし はいぞく さき ゆうしぶかしつけか
私が配属された先は、融資部貸付課で
せつりつごま そしき
あつた。設立後間もない組織であつたか

ぶちょう かちょう にほんぎんこう しゅつこう
 ら、部長も課長も日本銀行から出向して
 きており、ぜんいん くんと う
 来ており、全員がその薫陶を受けて
 ゆうしぎょうむ なん まな
 「融資業務の何たるか」を学んだ。その
 ゆうしぶ さいだい なや まえ そしき ひ
 融資部の最大の悩みは、前の組織から引
 つ いじゅうち
 き継いだボリビアのサンフアン移住地の
 ふりょうさいけん
 不良債権であった。

うえ こま
 その上に困ったことには、サンフアン
 いじゅうしゃ かいがいいいじゅうじぎょうだん こうかん も
 の移住者が海外移住事業団に好感を持っ
 ていないことであった。これには訳があ
 ぜんしん にほんかいがいきょうかいいんごうかい
 った。前身の日本海外協会連合会の
 わかつきやすお もとしぶちょう かいがい
 若槻泰雄サンタクルス元支部長が海外
 いじゅうじぎょうだん のこ おお
 移住事業団に残れなかったことが大きく
 えいきょう みどり かんごく いぬ かよ
 影響していた。「緑の監獄」「犬も通
 けいよう きゅうじょう
 わぬ」と形容されたサンフアンの窮状
 すく けんめい どりよく わかつきし
 を救おうと、懸命に努力した若槻氏では
 ぜっぽう すんど いじゅうぎょうせい
 あったが、その舌鋒は鋭く、移住行政
 しゅかん がいむしょう すんど たいりつ
 を主管する外務省と鋭く対立した。

とうだいそつ がいむじむかん たいりつ
 とともに東大卒のB外務事務官との対立
 りょうしゃ した しよくいん ま こ
 は両者をそれぞれに慕う職員を巻き込
 こうそう げきか しゅうしゅうふのう おちい
 んでの抗争へと激化し、収拾不能に陥
 わかつきし かいがいいいじゅうじぎょうだん
 った。そのため若槻氏は海外移住事業団
 のこ わかつきし した
 に残ることができなかった。若槻氏を慕
 すういん しよくいん じぎょうだん さ
 う数人の職員もまた事業団を去った。
 ほう ちち わかつきし
 この報に「コロニアの父」と若槻氏を
 けいあい いじゅうち おお
 敬愛していたサンフアン移住地の多くの
 ひとびと ひたん なみだ ほか
 人々が悲嘆のあまり涙した。この他の

しぶ とくしゅじじょう
 支部にはない特殊事情によってボリビア
 のサンタクルス支部へ事業団本部から
 はけん しよくいん こうかん
 派遣される職員は、コロニアから好感を
 も むか きたい
 持って迎えられるという期待はまったく
 も わかつきし ご
 持てなかった。(注)若槻氏はその後、
 たまがわだいがくきょうじゅ てんしん がいむしょう
 玉川大学教授に転身して、「外務省が
 け にほんじん まいにちしんぶんしゃかん あらわ
 消した日本人」毎日新聞社刊などを著し
 ている)

うえ うみ さかな て はい なんべい
 その上に、海の魚が手に入らない南米
 おくち どうぜん
 の奥地のボリビアは、当然のこのよう
 しよくいん きぼうきんむち さいかい
 に職員の希望勤務地の最下位にあった。
 じぎょうだん はい ねんめ わたし てん
 そこに、事業団に入って4年目の私に転
 きんめいれい くだ と ひ
 勤命令が下ったのだ。まさに「飛んで火
 い なつ むし ことば
 に入る夏の虫」という言葉がピッタリの
 かいがいてんきん
 海外転勤であった。



写真3-2 母子一緒のパスポート写真とボリビア入国スタンプ

にほん じさ じかん ちきゅう
 日本との時差が13時間もある地球の
 ほんたいがわ ち あし ふ い
 反対側にあるボリビアの地に足を踏み入
 ねん さい とき
 れたのは、1969年、27歳の時であ
 だいに かいこく い せんぜん
 る。「第二の開国」と言われた戦前・
 せんご つう やく ねんかん およ いっばんじん
 戦後を通じて約30年間に及んだ一般人の

かいがいとこうきんし かいじょ ねん
海外渡航禁止が解除された1964年か
らわずか5年しか経っていなかった。

つま せいご かげつ ちょうじょ とも がつ
妻と生後5カ月の長女と共に7月15
日にはねだくこう た きゅうゆ
日羽田空港を発ち、ホノルルで給油して
ロサンゼルスで1泊、そこから乗り継いで
ペルーのリマでさらに1泊した。リマ
からはプロペラ機で雪のアンデス山脈の
らんきりゅう
乱気流にもまれ、エアポケットにはま
りながら山を越えると、緑一面の樹海が
め と こ
目に飛び込んできた。

かつしよく やまな いったん かなた
褐色の山並みが一転してはるか彼方の
ちへいせん みわた かぎ こ みどり か
地平線まで見渡す限りの濃い緑に変わっ
た。それと同時に飛行機は降下体勢に入
り、ボリビア国サンタクルス市のエル・
トロンピーリョ空港に着陸した。飛行
じかん じかん たび
時間だけで33時間の旅であった。

よく にち にほんじかん にち げんち
翌19日(日本時間20日)の現地の
しんぶん ごう げつめんちやくりく
新聞でアポロ11号の月面着陸が

だいだいてき ほう おな じかんたい
大々的に報じられて「ほぼ同じ時間帯に
おな そら うえ こうようかん
同じ空の上に行った」という高揚感をも
しめん なが
って紙面を眺めた。

かいたくさいぜんせん まち
開拓最前線の町サンタクルス

そのボリビアは、国土面積は日本の約
ばい じんこう せぎんねんじほうこく やく
3倍。人口は、世銀年次報告では約40
まんにん せいかく
0万人といわれていた。ただし、正確な

こくぜいちようさ たいせい おも
国勢調査ができる体制にあると思われ
なかつた。げんち いっぱんてきつうねん
なかつた。現地の一般的通念では、80
まんにん こくど ぶん
0万人といわれていた。国土の3分の1
し さんかくちたい じんこう
を占めるアンデスの山岳地帯に人口の3
ぶん す がわ げんりゅういき
分の2が住み、アマゾン河の源流域を含
むぶん とうぶ ていちたい じんこう ぶん
む3分の2の東部の低地帯に人口の3分
の1が居住すると大雑把にとらえられて
きた。



写真3-3 サンハビエル村の古い開拓者の子孫

とうじ こうち ていち おな くに おも
当時は、高地と低地では同じ国とは思
おもむ い さんかく
えないほどに趣きを異にしていた。山岳
ちたい ひとびと じだい でんとうてき
地帯の人々はインカ時代からの伝統的
いしよう せんじゅうみんぞく かれ はくじん
衣装をまとう先住民族と彼らと白人との
こんけつ ひとびと しゆたい とうぶ
混血の人々が主体をなしており、東部の
ていち はくじん しゆたい
低地は白人が主体となっていた。

つうじょう せいかつけん けいざいけん ほか
しかし、通常の生活圏・経済圏の外に
おく らぞく ちか しゅりょうみんぞく
は、奥アマゾンでは裸族に近い狩猟民族

が、そしてパラグアイとの国境に近いチ
 ャコ地方にはグアラニー族に近い先住民
 がいた。サンタクルス市からコロニアサ
 ンプアンに向かう途中の川は、かつては
 交通の最難所であったが、この川の名は
 「ピライ川」という。グアラニー語で
 「魚が少ない川」という意である。ちな
 みにパラグアイの日本人移住地アルトパ
 ラナの近くを流れる川は「ピラポ」とい
 うがこちらは、「魚が多い川」という
 意味である。地名に、先住民の名残があ
 る。

医療が発達していない時代には高温
 多湿の低地の気候や疫病そして危険生物
 が敬遠されて、狩猟で生きていた先
 住民がわずかにいただけで、長い間
 東部の低地帯は、手つかずの状態にあっ
 た。そこをスペイン人を主体とする白人
 が開拓を始めた。その拠点となったのが
 サンタクルス市である。人口は当時10
 万人前後といわれていたが、まさに
 西部劇の映画から抜け出してきたような
 開拓最前線の様相を呈した町であった。
 最初に住んだ家は大聖堂のある中央
 広場から東へわずかに700メートルしか離れ

ていなかったが、そこも舗装されておら
 ず砂地の道で、家庭の炊事や洗濯後の水
 が道に投げ捨てられていた。道路の中央
 には常に水たまりがあったので、人々は
 一段高くなっているコロニア風の家
 の軒下を歩いた。雨期には道路が川となる
 ので反対側に渡る女性を背負って小銭を
 もらう人を見かけた。



写真3-4 最初に住んだオール口通り(1969年筆者撮影)

道路からのすえた臭いが辺り一面に漂
 っていて、それが、この町の固有の臭い
 となっていた。電力事情も悪く、週2
 回の停電の時には石油ランプで明かりを
 取った。電気で温めるシャワーも機能せ
 ず、冷水に近い水で済ませていた。
 中心から半径1キロの円周を描く道路
 幅50メートルもある第1環状線も舗装されて
 おらず、風の強い日は、そこから強烈な
 砂ぼこりが巻き上がるので、執務すると

きは、ダチヨウの羽を片手に砂を払いながら字を書くこともあった。

しかし、「樹から美女が降る」といわれるくらいラテン系の美しい女性が多かった。夜になると近所の若い娘のいる家の前からは、ギターの調べに乗って恋を語りかけるセレナーデが聞こえてきてなるほどラテン系の町だと思わせた。



写真3-5 若いウルセーニヤ（サンタクルスっ子）たち
(1969年筆者撮影)

休みの前の夜は、どこからともなくパーティーでのタキラリというアンデス高地のフォルクローレとは趣を異にするサンバに近い陽気なリズムのサンタクルス独特の音楽が流れてきて、それが空が白んでくるまで続いた。

着任当時の海外移住事業団サンタクルス支部は、派遣職員は、澤地隆治支部長と私の2人、日本からの日本語教師1人、現地採用職員は日本人9人、ボリ

ビア人1人であった。

そして二つの日本人移住地にはそれぞれ事業所があった。サンフアン事業所と試験農場を合わせて派遣職員4人、現地採用職員6人および診療所への日本からの派遣医1人。オキナワ事業所は、派遣職員2人と現地採用職員2人と日本からの派遣医2人という総勢30人の陣容であった。

それとは別に、小島進、戸水康二の両農業土木技師の管轄の下で、池田篤雄さんを班長とする土木工事班があり、ここには日本人とボリビア人の雇員が50人以上、多い時は100人近くいた。

工事班は、サンフアン移住地内の道路の整備、橋の架橋等をほぼ終わってその後の管理をサンフアンの自治体に移管して、1970年からコロニアオキナワを本格支援するため第2コロニアに事業所と試験場を建設する準備をしていた。

海外移住事業団の仕事は、道路、橋、排水溝等のインフラ整備と治安、医療、教育の充実を図るという多岐にわたるもので「子供たちが安心して住めるコロニアの創世」を支援するのが目的であっ

た。それには、^{なん}何^{かくのうか}といつても、各農家の
^{けいざいてききばん}経済的基盤^{かくりつ}の確立^{ぜんてい}が前提となる。そのた
^{しきん}めの資金^{ひつよう}が必要であるが、^{とうじ}当時のコロニ
^{じょうたい}アの状態は、^{げんちきんゆうきかん}現地金融機関^かから貸し付け
^{じょうたい}をしてもらえる状態ではなかった。経済
^{てきじりつ}的自立^{うなが}を促すためには、^{しょうきぼ}たとえ小規模で
^{じぎょうだん}あっても事業団の融資^{ゆうし}が必要不可^{ひつようふかけつ}欠である
^{たんじゆん}った。単^{こすう}純な戸数^{おやこ}ではなくて、親子^{いち}で一
^{けいざいたんい}経済単位^{ばあい}の場合もある^{こすう}ので、その戸数
^{かんさん}換算^{いじゆうち}ではサンフアン移住地^{まん}（2万713
^{やく}2^こヶ^{いじゆうち}ル）約150戸オキナワ移住地^{まん}（4万
^{やく}6877^こヶ^{のうか}ル）で約180戸の農家^{ゆうし}が融資
^{たいしやう}対象^{たいしやう}となった。

そして、^{わたし}私^{ゆうし}は、その融資^{せきにんしゃ}の責任者^{せきにんしゃ}とな
 った。 (つづく)

^{ちゆうき}注^{しやしん}記^ず：これまでの写真および図は「コロニ
^{にゆうしょく}アオキナワ^{しゅうねんきねんし}入植50周年記念誌^{いんよう}」から引用。

※本書は、^{ほんしょ}日系^{にっけい}2世^{せい}の人^{ひと}たちが読みやすい
 ように全漢字ルビをふっています。



琉球新報社のご厚意で転載
 させていただきます。ご関
 心を持たれた方は、下記琉
 球新報社URLをご覧ください。
<https://store.yukyushimpo.jp>

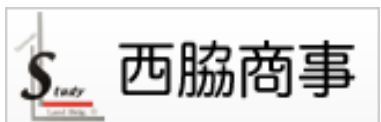
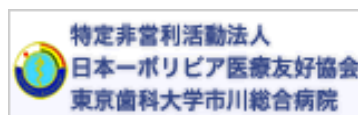


写真3-6 第一環状線の内側のサンタクルス市中心部 (1970年筆者撮影)

編集委員

椿 秀洋 細萱 恵子 大川 裕司

◎日本ポリビア協会維持会員一覧◎



Copyright© 2002-2023

一般社団法人日本ポリビア協会
ASOCIACIÓN NIPPON-BOLIVIA

All rights Reserved

(本誌の全ての掲載記事、写真、図表などの複製、転載、改変は禁止されています)